



ニッポン
ドクター和の



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

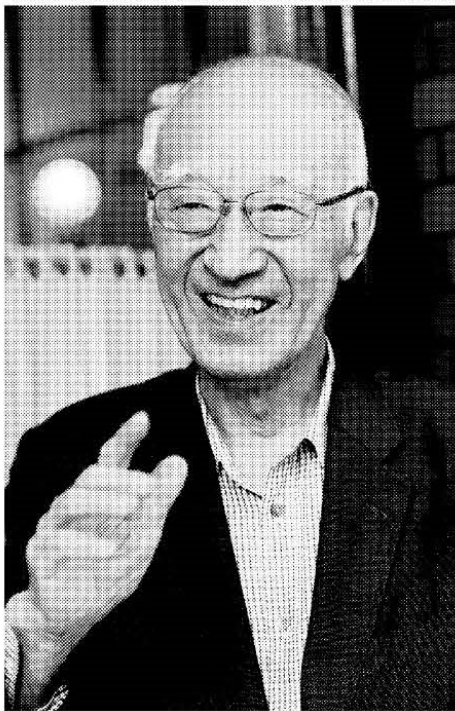
1月17日。阪神淡路大震災から26年が経ちました。当時市立芦屋病院に勤務していた私は被災者の治療に死に物狂いでした。下敷きから掘り起こされた負傷者が次々と運ばれて病院の廊下に溢れました。なす術もなく亡くなっていく人を前に絶句したあの日は、まさに地獄絵でした。「まるで、戦場やな」

四半世紀以上経った今、今度はコロナ禍によってまたあの時と同じ言葉を吐く日が来るのでは。病院やホテルが満杯なので、自宅待機を余儀なくされた「無治療感染者」からの悲鳴に、てんてこ舞いです。出口が見えない分、26年前よりもやりきれなさを感じます。そして不意に、戦争の真実を書き続けたこの人の本を読み返したくなるのです。

『日本のいちばん長い日』な

作家 半藤一利

189



半藤さんは数日前から歩行が困難になりましたが、死の直前まで妻の末利子さんとお喋りをしていたといえます。その後、部屋で倒れているのを発見。か

かりつけ医が駆け付けて、死亡確認したとのこと。お見事な平穩死であり、痛くない死に方だったとお見受けします。

半藤さんの死因は「老衰」でしたが、同じ死に方であっても、医師によっては「急性心不全」と書く可能性もあります。死亡診断書に「老衰」と書いてはいけない、他の病名を書けと一昔前までは教育されていたのです。それが今や、「老衰」は日本人の死因第3位になったわけですから立派な病名なのです。と同時になぜ今、戦時のような感覚に再び陥らねばならぬのか？ このコロナ禍の騒乱に半藤さんは何を思ったことでしょうか。

〈ジャーナリズムに煽られて加速した国民世論の勢いに押されて、ジャーナリズムがさらに加速してしまう。戦争を煽る奴がいるじゃないですか。今でもたくさんいます〉

半藤さんは、あるインタビューでこう語っていました。まさに今、コロナによってこの不穏な空気が再び国を包んでいるような気がします。今年が「日本のいちばん長い一年」にならないよう冷静を保たなければ。

死因は穏やかな「老衰」